カナダ大使館で見られるイヌイットの彫刻。アムウェイ環境財団の後援の展覧会。

ミュージカル「赤毛のアン」。

エドワード島を訪れ、このミュージカルを楽しんだ。日本からも、1989年だけで1万人のファンがフェスティバルを訪れている。毎年、本場シャーロットタウン・フェスティバルで上演されるミュージカル「赤毛のアン」が、今年はオリジナル・キャストもそっくりそのまま、日本へやってくるわけだ。

7月1日から7日まで連続7日間、カナダを代表するオーフォード弦楽四重奏団が、カナダ大使館のシアターで室内楽を演奏する。ピアノ＝ジェーン・クープ、チェロ＝ショーナ・ロールストン、クラリネット＝ジェームズ・キャンベルが客演するのも、楽しみだ。

Bunkamuraで展示されるイヌイットの版画。

「グレート・カナダ'91」実行委員会とアスカ・フィルム・インターナショナルが共同で実施するのは、6月29日～7月7日のカナディアン・シネマ・ウィーク。カナダ映画は、日本ではアメリカ映画やフランス映画ほど知られていないが、歴史が若いだけに意欲的な作品が次々と生み出され、その質の高さ、普遍性、思想性で世界の映画評論家たちから注目されている。

上映館は、Bunkamuraのル・シネマ2、東京・青山の草月ホール、東京・吉祥寺のバウスシアターの3館。ラインナップは、"カナディアン・ウィメンズ・シネマ"として、ジャズ・ピアニストの一生を描いたフランシス・マッケンヴィッツ「回転扉」、ミシェル・ブロール監督「A Paper Wedding」、パトリシア・グルーベン監督「Deep Sleep」ほか、"カナディアン・ニュー・シネマ"として、エジプトで発見された白黒映画を復元したオリバー・アセリン監督「The Statue」、自分の家を建てるために、働くだけの平凡な男が辿る人生の転変を描いたイヴ・シモノー監督「Perfectly Normal」、"国立映画制作庁アニメ・スペシャル"としてノーマン・マクラレンを追悼したカナダ・アニメ名作集などが予定されている。

Bunkamuraギャラリーで7月1～14日まで開催される「コンテンポラリー・イヌイット・アート展」は、ブリティッシュ・コロンビア大学民族博物館のコレクションから現代イヌイット作品を約40点選んで展示する。カナダ大使館で行なわれるイヌイット展と合わせてご覧いただきたい。

6月27～7月14日、東京・青山のスパイラルホールで立体アーチスト、アラン・ベルヒャーが連作「コンドー」を展示、6月24日～7月27日まで東京・ベイエリアの佐賀町エキジビット・スペースでジュヌビエーブ・カデューの写真展も開催される。

カナダのレコード大賞であるジュノー賞を幾度も受賞したことのあるピアニスト、アンドレ・ギャニオンも、カナダ大使館の新しい劇場で7月12～14日、コンサートを行なう。ギャニオンは、クラシックの知性をもったロマンチシズム溢れるスタイルと解釈で有名なピアニストである。

7月10日、上野の東京文化会館小ホールで公演するアンジェラ・ヒューイットは、欧米で定期的に公演しているカナダ人ピアニストで、来日公演は今回が2度目、日本のファンも多い。

カルガリー少年合唱団は6月30日、渋谷のBunkamuraに登場する。

イヤー・オブ・カナダは年間を通じて多彩な行事

カナダ建国を記念する7月に実行委員会が集中企画した「グレート・カナダ'91」のほかに、今年は12月まで年間を通じて、音楽、絵画からビデオ展など、カナダのさまざまなイベントが楽しめる。

東京・渋谷のBunkamuraで幕を開けるミュージカル「赤毛のアン」は、名古屋、京都、大阪、広島、福岡、近江八幡、横浜と日本の西半分を巡回公演したあと（後出の日程表を参照）、再び東京に戻り、厚生年金会館で8月13～20日までサヨナラ公演を行なう。

カナダ大使館新庁舎のギャラリーでトップを切って公開されるのは、新庁舎の設計構想を担当した建築家レイモンド・モリヤマ氏のデッサンや模型を披露する展覧会。期間は、4月15日から約1か月。

カナダ大使館ギャラリーでは、9月1日から30日まで、フレッド・トンプソン建築展も予定されている。

大使館ギャラリーで見られるのはそのほか、環境保護に深い共感を抱いて自然を描く世界的な画家ロバート・ベートマンの個展（8月21日～9月20日）、ライブコンサートを拒否しレコードでだけ演奏を発表した伝説的ピアニスト、グレン・グールドに関する資料を集めた展示（9月24日～11月9日）などが予定されている。